

毒島のB2級落ち

恐れていたことが起こってしまった。6月18日の平和島一般戦2日目3R、昨年のMVP・毒島誠が痛恨のフライングに散った。丸亀SGオールスターでもFを切っており、今期2本目。あっせんが入っている徳山オーシャンカップ（7月22日〜）終了後、90日間のF休みに入る。毒島の今期（5月以降）の出走回数は31。残りのあっせんではA1級最低出走回数90走をクリアする可能性はほぼなかった。5月からA2級の最低出走回数も80走（以前は70走）に増えたり厳しい。2本目のFの事故点も20点から30点に増加しており、現状で50点。70走したとしても事故率が0・70を超えてしまい、来期（25年1月以降）はB2級に転落することが濃厚となった。

ルール改正の落とし穴

このF罰則の改正が発表された時、優勝戦で2本目のFを切った際の事故点50という異次元の点数

にばかり注目が集まったが、切るタイミングによつては、普通のF2でもB2級に降格することが証明されてしまった。期初めにFを切ってしまった選手は、出走回数だけではなく、事故率をいかに下げられるか考えながら走らなければならぬ。ある程度の出走回数が増えるまで、決してスタートは行かない、いや、行けないだろう。一般戦でもF持ちのSGクラスの選手が、FなしのB級の選手にまくられるシーンが増えるのではないだろうか。複雑過ぎるルールは、ライトなファンには分かりづらい。なぜF1本しか持っていないA1級選手が、あつさり負けるのか疑心暗鬼になってくるファンも増えるのではないか。

誰が得をするのか

確かに、この厳しすぎるルールはFの本数を減らすかもしれない。返還が減れば、一時的に売り上げは上がるだろう。しかし、長い目で見れば、いい策とは思えない。毒島のようなスター選手がB

2級に落ちて、月1節、一般戦を走る（来年3月のクラシックは出場可能。クラシックを勝てばオールスターも出場可能）のと、A1級でSG、GIを走るとのでは、どちらが売り上げに貢献するのかが説明する必要もないだろう。自己責任といつてしまえばそれまでもだが、厳しすぎるルールは、選手もファンも施行者も損をするのではないか。

多すぎる不良航法

また、最近は不良航法の数が多すぎる。数年前に追い抜き、突っ込みに関しては判定基準が厳しくなったが、それにしても多い印象だ。調べてみると今年の5月の不良航法の回数は419日開催して290回。昨年5月は401日開催して238回。明らかに増えている。不良航法に関してルール改正などはしていないが、数字が示す通り、審判のジャッジは間違いなく厳しくなっている。現在の不良航法の減点は10。予選で1回やれば、予選突破はほぼ絶望的とな

る。選手はとにかく不良航法を取られないようにレースをするしかない。

厳しくなった不良航法の基本ルールはこうだ。直線などで触先が掛かっている内側の艇が、外の艇より先にターンマークを回り、外の艇に少しでも接触すると審議対象となる。前を走る選手が競っていて、ターンマークがガラ空き。そこを後ろからきた選手が小回りしても、先行していた外側の艇と接触すれば審議対象となる。このルールで抜くのは至難の業。よほどの実力差がないと無理だろう。GIやSGなど、トップレベルの選手が走る場合、外枠から舟券に絡むためには、展開やスタート、機力など、これまで以上のプラスチックが必要となってくる。F持ちで外枠ともなると、さらに購買欲はそがれる。本命党には買いやすいのかもしれないが、ルールでがんじがらめにされたボートレースを望むファンは少ないはずだ。

艇言

報知新聞 藤原邦充

藤原邦充（ふじわら。くにみつ）
1974年生まれ 50歳

香川県観音寺市生まれ。近畿大学を卒業。就職浪人の末、98年に報知新聞入社。芸能社会、中央競馬、ボートレース（1年だけ）、一般スポーツ担当を経て05年から2度目のボートレース担当に。競輪担当になって観音寺競輪取材することが夢だったが、無念の廃止に。